ぼいす

VOICE
vol.11
2003.9.20
北区飛鳥山博物館だより

ASUKAYAMA

◆平成15年秋の企画展◆

団地ライフ

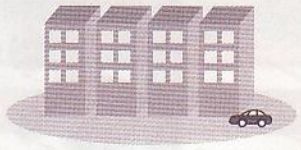
「桐ヶ丘」「赤羽台」団地の住まいと住まい方
平成15年10月25日(土)～12月7日(日)

2DKの間取り、水洗トイレ、ステンレスの流し台、
白いクロスを被せた応接セット、
ダイニングキッチンの食卓テーブル、
ジューサー、オーブントースター、魔法びん、
すべてが憧れだったくらし。
それが団地ライフ。

企画展

団地ライフ

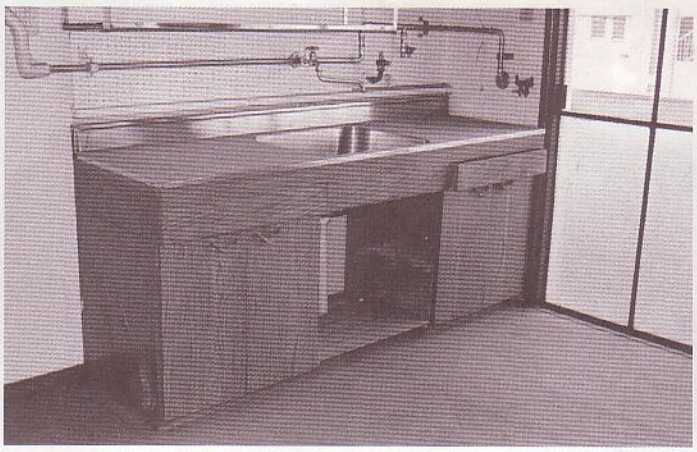
―「桐ヶ丘」「赤羽台」団地の住まいと住まい方―



戦後の日本では、深刻な住宅難を解決するべく多くの集合住宅-団地-が建設されました。こうした時期、北区では昭和20年代から30年代にかけて駐留軍に接収されていた旧軍用地が返還されていきます。返還された土地には団地や公共施設の建設が計画され、私たちが現在暮らす北区の形ができあがっていきました。

昭和28年東京都から桐ヶ丘団地の計画が発表されます。約16万坪の敷地に4000戸を越える住宅を建設する都内最大規模の計画でした。計画は都市計画事業として実施され、約20年の歳月をかけ約5000戸の住戸を建設して昭和51年に完成しました。桐ヶ丘の計画発表から約10年後、隣接する赤羽台では公団による大規模団地が建設されました。6万坪を越える敷地に3000戸を越える住宅を建設するこちらの団地も、当時、マンモス団地の誕生として新聞で取り上げられた程です。こうして、北区には都営・公団それぞれの大規模団地が隣接して所在するという都内でもまれなベッドタウンが完成したのです。

団地の計画にあたっては、住宅棟の配置、公園や学校施設の配置などに工夫が凝らされています。また、各世帯の家族構成に対応できるように様々な間取りの住戸も設計されました。団地はまた、新しい住まい方の提案の場ともなりました。今ではごく普通に見られるダイニング・キッチンが普及するのも団地からです。2つの団地でもダイニング・キッチンを備えた2DKなどの間取りの住宅が建設されました。そして、入居された方々の新しい生活が始まりました。ちょうど日本の高度成長期に歩調を合わせるように、テレビや冷蔵庫が家庭に登場し、ステンレスの流し台で調理された食事を家族で囲む、こうした生活が多くの住宅のなかで営まれたのです。一方、多くの人々が暮らす集合住宅ならではの問題解決も必要でした。自治会などが中心となり、電話組合の結成や牛乳の販売など日常の問題を解決していく努力が続けられたのです。



赤羽台団地完成時に設置されたステンレス流し台

今回の展示では、こうした団地の住まいと住まい方を資料や写真などでご紹介していきます。会場前のホワイエで実際のダイニングキッチンの再現なども企画していますので、お楽しみ下さい。 (R.Y)

平成16年春の企画展

「(仮)狐火幻影～稲荷と芸能」

平成16年3月13日(土)～同年5月5日(祝・水)

古くから人里近い森に住んでいたキツネは、人にとって身近な動物であると同時に、稲荷の神使として霊力のある神秘的な動物と考えられていました。

かつて関八州の稲荷の惣祠と言われた王子稲荷神社は、キツネが住むにふさわしい崖線に位置しています。王子稲荷の存在によって、この地域にキツネの霊的イメージが結びつき、落語「王子の狐」のように、芸能や文芸、絵画など様々に表現されました。

王子は江戸のマジカル・ゾーン

企画展では、王子と稲荷、そしてキツネとの関わりを、主に芸能や風俗に表れた現象を通して探っていきます。浮世絵も多数展示の予定です。

ぜひキツネに「ばかされ」に来て下さい!? (K)

来て！見て！さわって！

むかしの道具

平成16年1月10日(土)～2月29日(日)

小学校中学年の学習単元「むかしの道具調べ」に対応する展示として開催している「来て！見て！さわって！　昔の道具」展。例年、洗濯・着付け・かまどの各体験事業とのセット授業に学校単位で参加する小学生はもちろん、火・土・日・祝日の一般公開日には多くの方々にご来場いただいております。おじいちゃん・おばあちゃん世代にはなつかしく、子ども達には新鮮な体験ができるコーナーも充実！さらに今年は展示スペースを広げて、よりパワーアップさせる予定です。進化しつづける(!?)昔の道具展をどうぞお楽しみに!! (洋)

ポンプからはね出る水に思わず「キャッ！冷たい!!」

ぼいす

もっと行列のできるミュージアムになりたい!!

地域博物館の「講座」運営について

石倉　孝祐

著名な経営学者・ピーター・ドラッカー博士は、日本美術の研究者としても知られる。専門のかたわら、美術愛好者と分析家の立場を兼ねそなえた独創的な日本美術の講演を博物館で精力的に行っている。これほど極端に専門の領域と異なる分野を担当するのは珍しいが、博物館の講座で、禁欲的に専門性に厳格な態度を貫き、一面、アカデミズムを水増して垂れ流すという弊は案外に目にすることではあるまいか。講座の多い北区飛鳥山博物館といわれて久しい。ここで当館のゲリラ的な講座運営について２つの事例を反省を交えてご紹介しよう。「12か月めぐり」という講座を３年間実施した。これは従来型の史跡巡りではなく、普段着の街の表情の中に文化スポットが「空間を共有」している意味を探り、講師・参加者が一緒になって街の魅力を探すという、小さな発見を四季折々の移ろいの中で体感するものであった。また「新聞に見る考古学」というのがある。市民が考古学に接する一番の機会は報道である。しかしマスコミの報道姿勢や執筆態度には専門から見て意外な落とし穴が潜んでいる。この講座はジャーナリズムとアカデミズムの乖離（かいり）を指摘するだけではなく、情報が生産され一方的に「消費」されていくこと自体に対する根元的な問題提議を行うものである。いずれの講座も学芸員がメーカーの代弁者としてではなく、ユーザーの立場に立って参加者と同じ目線を共有しつつ、かつこれを学問的に複眼視して相対化するという離れ業を行っている。これは方法論的に冒険ではあるが、専門性に固執したルーティーンな講座運営に陥らず、たえず参加者と課題を共有する態度を頑固に貫いているとも評価できないだろうか。「文化施設に経営的感覚を」という声を多々聞く。確かに講座運営でもクラスター分析に基づいたエリアマーケティングやカスタマー・リレーション・マネジメントは改善の優れた方策であろうが、案外、顧客満足を「自己満足」する「自己評価」以前に、「目線の共有化」に経営の鍵があるのではあるまいか。ドラッカー博士の教養の広さには及ばずとも、これからの学芸員は学者商人を志向すべきだろう。進化する講座運営。そしてその種はすでに飛鳥山に蒔（ま）かれている。

出会いはいつも新鮮です

EVENT REPORT

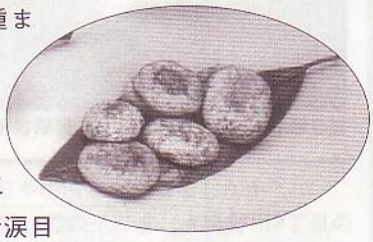
イベントレポート

お出かけ事業 “縄文クッキー”をつくる

去る５月15日。北区赤羽の八幡小学校に出向いて、子ども達と縄文クッキー作りを行いました。この縄文クッキーづくりは昨年度に引き続き、総合的な学習の一環として、八幡小学校からご相談を受けて実現したものです。今年度も古屋学芸員と共に出向きました。

あいにくの雨でしたが、子どもたちはやる気満々。みんな思い思いの縄文人？に扮して私達を出迎えてくれました。昨年度も様々な扮装でクッキーづくりに挑んでいたので、我々も“貫頭衣（かんとうい）”を用意しました。（これでは弥生人ですが。）笑いとも歓声ともつかないどよめきの中、家庭科室に登場。ひとしきり縄文人の調理用具と食べ物の話をしてから、いよいよ縄文クッキーづくりに挑戦です。

各班で役割分担があり、調理担当はそのまま家庭科室に残り、火おこし担当は校舎裏に出発。火おこしは“まいきり”の方法で行いました。（本当はもみきりで行いたかったのですが、今回は弥生人の道具に頼りました。）火種を作ったら七輪の炭に移します。しかし、みんな火種まではできるのですが、なかなかそれが燃え移らない。四苦八苦してようやく一人の子が火種から炭に火を移すことに成功しました。けむりで涙目になりながらも、そのほこらしげな顔。結局、炭に火がついたのはその班だけで、他の班は火をおすそわけしてもらいました。一方、調理班はというと、イノシシの代わりのブタ肉をミンチ状にしたり、クルミを砕いたり、ちょっとワイルドな家庭科の時間。それに野鳥の卵の代わりにうずらの卵と、塩を少々入れてよくこねて、一口大のハンバーグのように形を整えました。



さて、いよいよこれを焼きます。フライパンでは味気ないので、博物館で作った浅鉢（あさばち）の上で焼きました。雨をしのぐ倉庫の中はおいしそうな匂いで充満。上手に焼けた班もあればこげついてしまったり、形が崩れてしまったり。お皿代わりの葉っぱに載せて、家庭科室に戻りました。さあ、試食です。おそるおそる口にした子どもたちから、感嘆の声が。「なんかつくねみたい」「これじゃあ縄文クッキーじゃなくて、縄文ハンバーグだ」「でもおいしーい」。我々も各班からおすそわけをいただく。お昼前のお腹にはことさらおいしく感じました。（直）

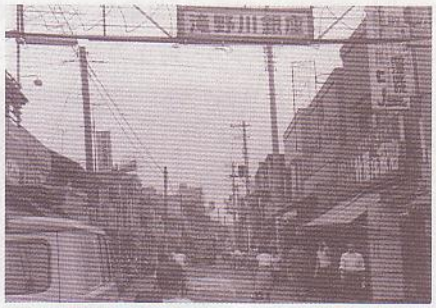
あるみるき special

◆滝野川銀座のいまむかし◆

滝野川銀座は明治通りとの交差点から、埼京線板橋駅の踏切までの総長約850mにおよぶ商店街です。この道は江戸時代の中山道にあたり、踏切手前には江戸より二里目にあたる一里塚がかつてありました。また、この辺りは「三軒家」とよばれていましたが、これは江戸後期に三軒の種屋があり、それから明治、大正と、この一帯に種屋が増えていったことに由来します。種屋は今でも数軒残っています。

そんな歴史のある滝野川銀座を歩いてみると、さすがに江戸時代の建物は残ってはいませんが、明治、あるいは大正、昭和といった、歴史を感じさせてくれる建物が何軒も残っています。軒を通りに出した木造の家だとか、雨戸の戸袋が銅でできている家だとか。それから、建物は建て替えられたけど、創業百何十年という商店なんかもあります。また、通り沿いの家は商店でなくても、間口に対して奥行きがある家が多いです。昔の名残でしょうか。

秋の一日、昔を思いはせながら、滝野川銀座をぶらり散策してみてはいかがですか?


昭和37年頃の商店街　倉田正義氏提供

同じ場所から写した商店街　平成15年8月撮影

道からちょっと離れた所にある馬頭観音

とても雰囲気のある建物

昭和29年の新撰組隊士供養墓碑
手川文夫氏撮影

昭和55年頃の榎本宅付近

今もほとんど変わってませんね　平成15

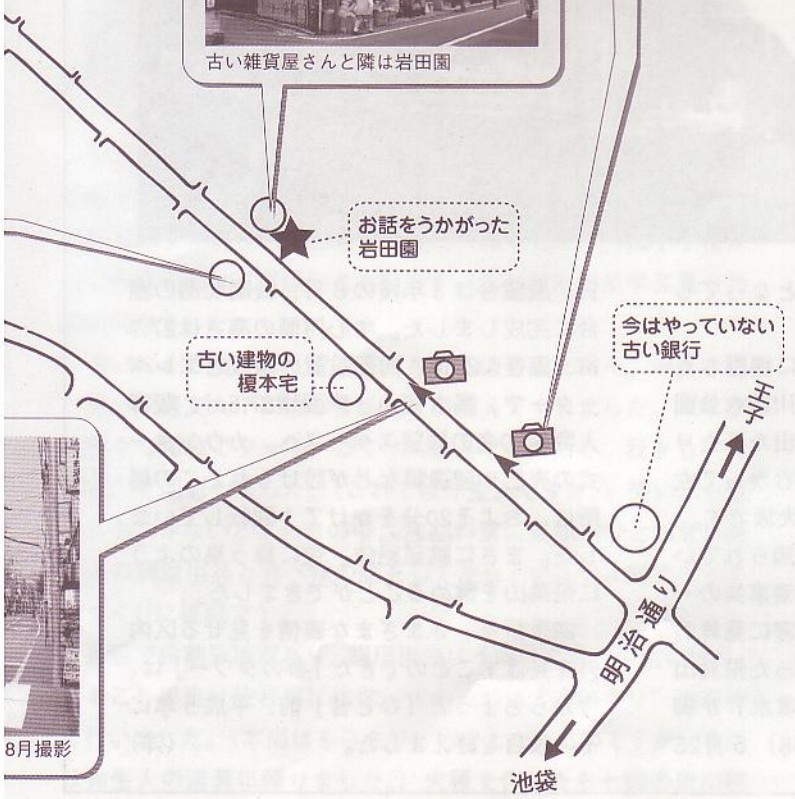
できてます

大正終り頃の旧中山道　　鈴木唯司氏提供

すっかり変わってしまいました　　平成15年8月撮影

っと
口な看板が

古い雑貨屋さんと隣は岩田園



8月撮影

インタビュー

滝野川銀座の思い出

六代目ご当主はお茶のソムリエです

今回は滝野川銀座の移り変わりをお聞きするため、嘉永2年（1849）から続くお茶屋さん「岩田園」にうかがいました。ご主人の岩田安生さん（昭和26年生まれ）は、ご先代から聞いたお話を交えて思い出を語ってくださいました。

はじめに、昔のお店の様子についてお聞きしました。岩田園では現在も狭山の工場でお茶を自家製造していますが、かつては滝野川にもお茶畑があったそうです。

〈岩田さん〉ここでずっとお茶を代々作ってきたんですけれども、都市化でもって、ここでお茶が作れなくなったということで、昭和23年かな、狭山のほうにお茶の工場を作りました。

〈聞き手〉このお店の周辺に畑があったんですか？

〈岩〉この裏の方もずっとお茶畑だったようなんですよ。（すべてが）私どもの直接の畑ではなくて、農家の方の畑だったり。それとよく聞きましたのはね、今の池袋の東口ですか、三越がありますよね、あの近辺もずっとお茶畑だったんだよって聞きました。

王子でお茶を作っていたことは知られていますが、野菜の産地という印象が強い滝野川に茶畑が広がっていたとは驚きでした。

続いて、昔の地域の様子について、ご先代から聞いたお話をうかがいました。

〈岩〉父が話していたのは、板橋駅近くの谷端川でもって、よく釣りをしたとか聞きました。

〈聞〉戦中の様子についてお聞きになったことはありますか？

〈岩〉（戦中も）ずっと（商売を）続けておりましたけれども、お茶自体が統制品になりました。父は終戦を軍隊で迎えてますので、祖父などが残って（店を）やってましたね。（店には戦災の）被害はなかったんです。

昔と今では、商店街の人通りがどう変わったかについてもお聞きしました。

〈岩〉私の記憶にある限りで、昭和20年代後半から30年代ですと、ここも結構人通りがありました。住んでいる人も多かったし。

〈聞〉商店街で特に賑わう日や場所などありましたか？

〈岩田さん〉ここじゃなくて、前のイイダ（＊滝野川7丁目のスーパー）のところ。あそこに行くといつも縁日みたい（な賑わい）でしたよね。こちらの坂の上から向こうを見れば本当に道路が見えないような状況。ほとんど夕方になると、そんな状況でしたね。

北区の人口は昭和30年頃から急増し、昭和40年には約45万人に達しました。岩田さんが小さい頃は、まさに最も賑わいがあった時代だったと言えるでしょう。

最後に、滝野川銀座の印象を改めてお聞きしました。

〈岩〉今、変な言い方をすると寂しい部分があるでしょ。そういったのは、全くなくて。もっとこう、人の声がしてるとこでしたよ。

かつて旧中山道は周辺の農家が青果市場への行きかえりに通る道でした。野菜を載せた荷車に代わり、今は車が行き交っています。時代とともに少しずつ姿を変えたとはいえ、ところどころに昔の風情を残す滝野川銀座は、やはり庶民的な「人の声がする」道だと感じています。

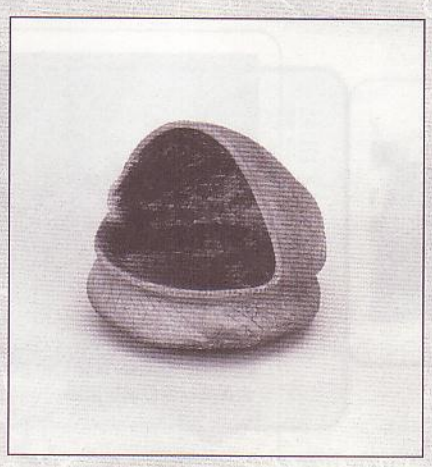
岩田さんにはお忙しいところ、快く取材を受けていただきました。どうもありがとうございました！　（K）

収蔵品のご紹介　手焙形土器

へんてこな土器である。あたかもあくびをしているような口があり、後ろには奇怪な文様が…。

これは「手焙形土器」といい、北区赤羽台遺跡から出土した。直径約17.5cm、高さ約15cm。鉢状の容器の上に覆いをかぶせ、一方は開けてある。背面には格子目状の文様を一面に施し、紐の表現と思われる粘土の帯を横方向に貼り付けている。ちょうど一昔前の手焙火鉢のような形をしているので、この名がある。ただし、ここで言う「手焙形土器」は一昔どころではなく、今から1900～1700年前の弥生時代の終わりから古墳時代のはじめに作られた物だ。西は九州から東は関東まで出土するが、多いのは近畿地方。その数は他の土器に比べると極端に少なく、関東では珍しい土器といえる。北区では赤羽台遺跡から出土した本例のほかに亀山遺跡から出土した一例があるだけだ。

いったい何のために作られたのか？それは実は専門家でもはっきりしたことはわからないが、内側にススがついているものが割と多く、中で火を燃やしたということはわかる。それは暖をとるためか、明かりのためか、はたまた何かを焼くためか？むし暑い夏の夜に、自室に置いて蚊取り線香を入れたいと思うのは筆者だけではないだろう（大切な資料ですから、もちろんそんなことはしてはいけませんが…）。いずれにせよ、覆い部分は中の火が消えないようにつけられたのだろう。手焙形土器は「火のための土器」なのである。



また、出土する場所を調べると古墳だったり、水田遺跡のあぜや水口などに置かれていたりする。どうやら葬送や農耕にかかわる儀礼に使用されたらしい。これらの祭祀で火が重要な役割を果たしたのだろうか。古代人の精神生活を垣間見れる土器である。　（古）

写真に見るあの日あの時

「飛鳥山」で鳥になる
～夢のタワー、登場～

「十年ひと昔」という言葉がありますが、本当に月日の経つのは早いものです。平成も、はや15年。小中学生に話をするとき、「昭和」はすでに「むかし」という時代区分になっていることに愕然としてしまいます。この写真に刻まれた空間も、自分自身の目で見、記憶しているものであるにもかかわらず、もはや「むかし」として懐かしむものとなってしまいました。

写真は昭和62年（1987）11月に撮影したものです。撮影場所は区立音無川親水公園西側の階段を上がり、音無橋に出たあたりです。都電や車が向う先（写真むかって左側）は、王子駅へとつづく飛鳥大坂です。

飛鳥山公園のシンボルとして知られていたこの展望台は、飛鳥山公園整備事業の一環で建設されたものです。埃被害に見舞われたグラウンドが「生まれ変わった飛鳥山公園」となり、「夢のお城や大噴水」が御目見得したのが昭和41年（1966）5月25日。展望台は3年後の8月、公園北側の高台に完成しました。中心円筒の高さは27.7m、直径5.20m。内部設置の階段とエレベーターで、高さ15m、床面積87.5㎡、収容人数約80名の展望スペースへ。カウンター式の売店や望遠鏡などが設けられたこの場所は、およそ20分をかけて1回転していました。まさに眺望絶佳、空に舞う鳥のように飛鳥山を眺めることができました。

四季折々、さまざまな表情を見せる区内外を見渡すことのできた「夢のタワー」は、今からちょうど「ひと昔」前、平成5年にその役目を終えました。　（洋）

博物館インフォメーション

コレ、知ってますか?

博物館にはいろいろなものが寄贈されますが、恥ずかしながら使い方などが分からないこともしばしばあります。普通は本などで調べていくのですが、結局直接うかがうのが一番ということも…。

そこで、今回みなさんに教えていただきたいのは、一昔前に駄菓子屋で売っていたカードゲームの遊び方です。昭和20〜40年代の様々な駄玩具(だがんぐ)とともに寄贈されたのですが、十二支をアレンジした動物の絵に、トランプのマークや数字、季節などが入っています。遊びのパターンがいくつかあったのだろうと想像しています。

「なーんだ、こんなのでよく遊んだよ」という方がいらしたら、ぜひお教えください!

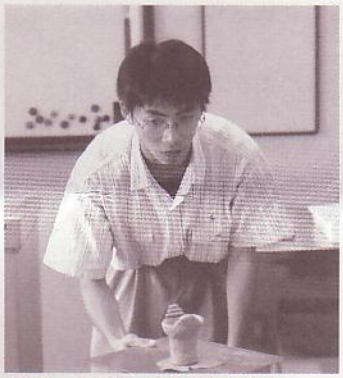
とてもカラフルな絵柄

お得な飛鳥山情報

博物館の目の前、園路をはさんだ向かい側左の植え込みに、大きな木が数本あります。桜の木よりも背が高く、幹まわりが1mもあるこれらの木はスダジイという木です。このスダジイ、秋になるとたくさんの実をつけます。よく言われるドングリです。やや細長い楕円形で、頭に帽子をちょこんとかぶったような、かわいらしい木の実です。それが木の周りにたくさん落ちるのです。秋になると植え込みの中はドングリでいっぱいです。都会ではあまりできなくなったドングリ拾い。お子さんやお孫さんといっしょに、昔を思い出しながら、ドングリ拾いをされてはいかがですか。

人物往来

今年の3月31日をもちまして、任期満了により平野祐子学芸員が“卒業”いたしました。5年間どうもお疲れ様でした。その後任として古屋紀之学芸員が着任いたしました。もう既にデビューをはたしておりますが、今後ともよろしくお願いいたします。また、7月15日をもちまして、川嶋智尚館長が異動し、その後任として高木博通新館長が着任いたしました。重ねてよろしくお願いいたします。



「ほら、こうやって作るんだよ」

古い写真をさがしています

みなさんのお宅に古い写真はありませんか?博物館では戦前から昭和50年代までの北区の街並みや人々の暮らしぶりがうかがえるような写真を探しています。近所の路地、まちのお祭り、今はない商店など、何気ない一コマが貴重な情報となることがあります。刻々と変わる北区の様子を記録しておくため、皆さまのご協力をお願いいたします。ご一報は03-3916-1133　担当クボノまで。

※写真は一時お預りさせていただいて、複写させていただいた後、ご返却いたします。

お客様の声

館の催し物に参加いただいた方々からの“ぼいす”をご紹介します。

第3回あるけおろじー「古代の道をたどる3」より

喧騒うずまく大都会を、古代のロマンを夢見つつ歩いた道すじには、往時を感じさせるものはほとんどありませんでしたが、講師の方のお話からその時代の面影を偲ぶ事ができました。街を観察しながら歩くことがめっきり少なくなってしまった昨今。今日は大変楽しく参加させていただきました。(区内60代男性)

街に残された、古代のかすかな記憶をたどっていくと、少しずつその時のことが浮かび上がってきます。そんな手掛りを、街に出て探してみてはいかがですか。(編)

講座「狂歌で江戸をよむ」より

狂歌は私にとってなじみがなく、時間があるからと軽い気持ちで応募させていただきましたが、受講するうちにその時代の状況が手に取るように見えてきて、現在と比較しながら楽しく学ばせてもらえてよかったです。もう少し時間をかけていただければ、なお良かったかなと……。少々欲張りでしょうか? (区内60代女性)

楽しい時間をすごしていただいて、我々学芸員もうれしく思います。時間や回数も体力?と相談しながらご希望に添えるよう、がんばりたいと思います。(編)

夏休みわくわくミュージアム03「第6回夏休み土器づくり教室」より

いっぱいおそわって、いっぱいやって、いっぱい楽しんでよかったです。(荒川区立尾久第6小の3年生・男の子)

本物の縄文土器に触れることができたり、縄文時代のお話をうかがうことができ、自分も楽しみました。(男の子の保護者・女性)

いっぱい楽しめてよかったね!また来年も参加してね。(編)

文様をそう合てきにつけるところが楽しかったです。また、わをつみかさねていくところが、広くなってしまったり、せまくなってしまったりして、むずかしかったです。(千代田区立番町小学校3年生の女の子)

子どもはとても楽しそうに製作していました。改めて子どもの性格を知ることができ、有意義な時間を過ごすことができました。(女の子の保護者・女性)

難しかったけど、最後には自分だけの縄文土器ができてよかったね。(編)

土いじりは子どもの頃していた記憶がありますが、ある意味、今の子は土のお団子も作る機会がないので、その点でもよかったと思います。これから勉強するであろう縄文時代。好きになってくれるといいです。(区内保護者・女性)

土器づくりに参加して、ほんの少し縄文人の気持ちになれたことを思い出してくれるとうれしいです。(編)

学芸員リレーエッセイ

博物館いろは歌留多

は　博物館　というまに　年が暮れ…　あっ！

とにかく早い！博物館の仕事をしていると一年が経つのが早いこと、早いこと。エッ、歳のせいだろうって……そんなことは……と、そんなこんなはさておき。

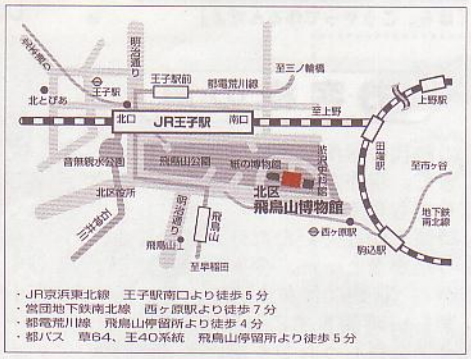
毎年、博物館では２回の企画展、夏の「わくわくミュージアム」、冬の「昔の道具調べ」を開催していて、この他にも、講座や小規模なスポット展示など沢山の事業が目白押しです。もちろん、全てを一人でこなせる訳もなく、６人の学芸員が手分けしながらおこなっています。それぞれが担当した事業の準備に入るわけですが、団体見学者への説明や取材などへの応対などもこなしつつ、募集PRや開催の段取り、資料の作成など事前準備をおこなっていきます。スタッフ総当たりでおこなう夏・冬の事業などもあり、気がつくと自分の担当事業が目前に迫っていて、サッと血の気が引くことも、なかなかスリルに満ちた日々!?を送っています。そうは言っても、事業に参加されたお子さんの笑顔や講座に参加された方々から「ごくろうさま」なんて言われてしまうと、本当にやってよかったと、学芸員冥利な気分を満喫できるのも、この仕事ならではです。こうして、今年もまた新幹線のように一年が過ぎていくのです。

決して、歳のせいでは……

利用のご案内

【開館時間】
午前10時00分～午後５時
（有料の展示室への入場は午後４時30分まで）

【休館日】
毎週月曜日（国民の祝日・振替休日の場合は開館）
年末年始（12月28日～1月4日）
国民の祝日および振替休日の翌日（土曜・日曜日の場合は開館）このほかに臨時休館日等があります。



【常設展観覧料】

	個　人	団　体	三館共通券
一　般	300円	240円	720円
小・中・高	100円	80円	240円

・小学生未満は無料
・団体扱いは20名以上
・三館共通券は当館のほか、渋沢史料館、紙の博物館をごらんになれます。

平成15年度下半期の主な催し物予定

10月

◆「人間国宝奥山峰石と北区の工芸作家」展（～13日）
◆秋の企画展「団地ライフ－「桐ヶ丘」・「赤羽台」団地の住まいと住まい方－」（25日～12月7日）
◆講座「笑いのなかに見る江戸」（12日・26日・11月9日・11月23日）
◆講座「第７回遺跡探訪　常陸の壁画古墳を訪ねる」（25日・11月1日）
◆講座「江戸切絵図探訪」（5日・19日・11月2日・11月16日）

11月

◆講座「第３回中級考古学講座　土器のはなし」（15日・22日・29日・12月6日）
◆講演会「近代ハウジングの実験場としての赤羽」（28日）

1月

◆学校対応展示＆体験学習「来て！見て！さわって！むかしの道具」（1月10日～2月29日）
◆講座「新聞で読む考古学03下半期」（18日）

2月

◆講座「江戸の名所図会を読む」（7日・21日・3月6日）
◆講座「文化住宅を考える」（28日）

3月

◆春の企画展「狐火幻影～稲荷と芸能」（13日～5月5日）
◆講座「第３回北区学入門講座」（27日）

催し物名は全て仮称です。
この他にも各種催し物を予定しています。詳しくは館発行「催し物案内」をごらんください。

編集後記

“ぽいす”11号をおとどけしました。いかがでしたでしょうか。今回の特集「あるく・みる・きくスペシャル」の取材は、博物館実習生に手伝ってもらいました。商店街での昔の建物の下調べから、昔の写真と同じアングルでの撮影と、暑い中がんばってくれました。みんな、どうもありがとう。“ぽいす”はいろいろな人のご協力でできています。これからも“ぽいす”にお力添えをよろしくおねがいします。

北区飛鳥山博物館だより
ぽいす　Vol.11
発　行　平成15年9月20日
編　集　北区飛鳥山博物館
〒114-0002 東京都北区王子1-1-3
TEL.03-3916-1133
発　行　東京都北区教育委員会
〒114-0022 東京都北区王子本町1-2-1
TEL.03-3908-1111（代）
印　刷　羽陽美術印刷(株)

刊行物登録番号　15-2-008